

## 【春日部むかしばなし】

### (1) 鷺香取神社の伝説

むかしむかし、今から1200年くらい前の平安時代の事です。  
ある朝、内牧の村にそれはみごとな毛なみの馬が迷いこんできました。  
「いったいだれの馬だろう？」

村の人々は首をかしげましたが、飼い主は見つかりません。

じつは、その馬は今の千葉県にある香取神宮で飼われていたものでした。なんと、馬はその香取神宮から逃げだし、はるばる内牧まで来てしまったのです！

やがて香取神宮の人たちが馬を追ってきたので、村の人はぶじ、馬を返してあげることができました。

そして、これもなにかの縁と、内牧に香取神社を建てることにしました。



それから300年ほどたった鎌倉時代の事です。

ある日、香取神社に馬に乗った男の人がやって来ました。この男の人はかの有名な源頼朝。鎌倉幕府をたてた武士です。現在の鷺宮町にある鷺宮神社に行くとちゅう、休憩をとるために立ちよったのです。

そののち、香取神社は鷺宮神社とひとつになり、鷺香取神社とよばれるようになりました。

鷺香取神社にはいろいろな人々がやって来ました。

たとえば、江戸時代には日本全国を旅して歩いた円空というお坊さん。円空は困った人々を助けようというねがいをこめて、仏さまを作るために日本中を歩いていたのです。

ここ、内牧の鷺香取神社でも丸太でえびすさまを彫刻して置いていきました。そしてまた旅にでてしまいました。

毎年7月18日は鷺香取神社のお祭りです。

お祭りの日ににぎやかなおはやしをはじめると、神社のうしろの杉の木からまっ白なへびがでてきたそうです。村の人はこれをよいことが起こる前ぶれとして、とてもよろこびました。しかし、今ではこの木は残っていません。

ふたつの神社の名前を持った内牧の鷺香取神社のお話でした。

## (2) 不動院の歴史

むかしむかし、今から200年以上も前の戦国時代のことです。  
現在の春日部市小淵のあたりに不動院という修験者のための大きなお寺がありました。  
修験者は山伏ともいい、山に入って修行をし、お祈りやうらないをする人々のこと  
です。

春日部の不動院は京都にある聖護院というお寺の配下で、江戸時代にはたいへん大きな力を持っていました。

不動院の歴史で忘れてはならないのがおみきという女の人です。

——黄門様。そう言えばみんなにおなじみ、水戸黄門のことですが、おみきはその水戸黄門のむすめ（養女）でした。

そして、不動院の8代目の住職、頼栄という人のおよめさんになったのです。

このとき、おみきは何人ものお供をつれて来ましたが、このお供のひとり、中島家には、水戸からもってきたという仏像と刀が今もたいせつにつたわっています。



しかし、時がたって明治時代になると、不動院にとってたいへんな時代がやって来ました。明治政府が修験道廃止令をだしたのです。そのため、たくさんの修験寺院が消えていきました。

こうした中で不動院の力もしいに弱まり、明治42年から大正5年にかけて、現在の東京都江東区にひっこしてしまいました。

けれども、このお寺も昭和20年に戦争で焼けてしまい、今ではもう残っていません。この土地のあとには中央寺というお寺がたち、不動院時代に使われていたという御手洗石が残されています。また、不動院と合わさった東京都台東区の正宝院にも、不動院からゆずりうけたという石仏が残っています。

現在の春日部市には不動院野という地名だけが残り、当時のおもかげは少しもありません。

しかし、この地名がそのむかし、不動院というお寺があったことをかすかに思いださせるよすがとなっているのです。

### (3) 牛島の藤の伝説

むかしむかし、今から700年くらい前の鎌倉時代の事です。  
ある大金もちの農家に、17才のむすめが住んでいました。

ところが、このむすめはかぜをひいてしまい、なかなか元気になりません。

「ごほん、ごほん！」

とても苦しうるのでおいしやさんにみてもらっても、どのおいしやさんも病気をなおすことができません。

そんなある日のこと、この家にひとりの旅のお坊さんがやって来ました。

「お坊さま。じつは、うちのむすめの病気がちっともよくなりません！」

困ったお母さんがそうだとすると、

「それでは、庭にある藤の木を近所のお寺にあげなさい。そうすればきっとよくなります」

とお坊さんはいい残し、どこかへ行ってしまいました。

そこで、家の人々が蓮花院というお寺に藤の木を移しかえすと……

なんてふしぎなことでしょう！ むすめの病気はきれいさっぱりなおってしまったのです。

この蓮花院は現在の藤の牛島のあたりにあり、天女山ともよばれていました。しかし、今ではかげも形ものこっていません。

けれど、そのあとにできた藤花園には、弘法大師がうえたといわれる樹齢1200年ほどの大きな藤が今もあります。明治時代のころまでは人の背よりも長い花が咲き、外国のおきやくさんもたくさん見物に来たそうです。

藤花園は、今でも春になるとうつくしい花を咲かせています。



#### (4) 幌墓の伝説

むかしむかし、武士がかつやくしていたころのお話です。

あるとき、古利根川のほとりにケガをした武士が迷いこんで来ました。それを見つけた親切な村の人が手あてをしましたが、男のキズはよくなりません。

そして、ある日とうとう息をひきとってしまいました。

死んだ武士は名まえはおろか年さえもわかりません。ただ、弓矢をふせいだり目印となる幌という布をせなかにつけていました。

そこで、村の人たちは幌といっしょに武士をほうむり、そのお墓を幌墓とよぶことにしました。

ところが、今から150年ほど前の江戸時代もおわりのころ――。

いったいどうしたことでしょう、なんとこのお墓に毎晩人だまがでるといううわさがたったのです！

村人はこわがってだれも近寄りません。

そこでさわぎをききつけた名主さんが、亡くなった武士のたましいをなぐさめるために石碑をたてることにしました。

また、そのときに内牧村の不干という人も、11人の仲間とともに供養のための俳句をよみ、それを石碑にきざみました。

それからは武士の人だまもでなくなり、村人の心配もなくなりました。

そして、今でもこの幌墓は、豊野地区にある工場のわきに静かに眠っています。





## (5) 三囲神社の伝説

むかしむかし、今から600年も前の室町時代のことです。

ある日、ひとりのお坊さんが今の滋賀県にある三井寺から春日部にやって来ました。とおいところから来たお坊さんには、とまる場所がありません。

そこで、親切な村の人が家にとめてあげたところ、この夜、お坊さんのゆめに古びたお社があらわれたのです！

「きつこのお社をさがせということにちがいない」

そう思ったお坊さんは、村の人にも手つだってもらい、お社をさがすことにしました。そして、とうとう草むらの中に古びたお社を見つけたのです。

そのお社の下には、つぼがおいてありました。

「いったいなんのつぼだろう？」

ふしぎにおもってのぞいてみると、何と中には、キツネにまたがったおじいさんの像が入っていました。



そして、さらにふしぎなことには、白いキツネがとつぜんあらわれると、像のまわりを3回まわってけむりのように消えてしまったのです。

そこで、村の人々はこのお社を三囲神社と名づけてたいせつにすることにしました。

それから何年もたったある日のことです。

三囲神社のすぐ近くに、おじいさんとおばあさんがすんでいました。

ある晩、そろそろねようかと思っていると、トントンととびらをたたく音がします。

「こんな時間にいったいだれだろう？」

おそるおそるととびらを開けてみると、そこには旅の男がいました。

妻にもうすぐ赤んぼうが生まれるので、手だすけしてほしいというのです。

おばあさんは男の人といっしょにお産<sup>さん</sup>のたすけに行きました。そして、おばあさんのおかげで旅人<sup>たびびと</sup>の妻はぶじ、元気な男の子を生みおとしました。

けれど、よく朝もういちど同じ場所<sup>ばしょ</sup>に行ってみると——。なんと、きのうあったはずの家<sup>いえ</sup>がありません！

「いったいどうしたことだろう？」

ふしぎにおもったおばあさんがおじいさんにたずねると、おじいさんは「三囲神社<sup>みめぐりじんじや</sup>のキツネが、人間<sup>ぼ</sup>に化けて助けをもとめに来たのだから」といいました。

それからしばらくたったある日のことです。

このおばあさんの家の前に1匹<sup>びき</sup>のキツネが死んでいました。そのそばには元気な子ギツネが1匹よりそっています。

「きっとこのキツネたちは、あの晩<sup>ばん</sup>の母親と赤んぼうにちがいない」

そう思ったおばあさんは、かわいそうな子ギツネをそだてることにしました。

じつは、この子ギツネはふしぎな力をもっていました。おばあさんが質問<sup>しつもん</sup>すると、天気をあてたり、人の未来<sup>みらい</sup>をうらなうことができるので、村のみんなから感謝<sup>かんしゃ</sup>されました。

この神社<sup>ふるすみだがわ</sup>は古隅田川のほとりにありましたが、大正時代<sup>たいしょうじだい</sup>のはじめに今の場所に移されました。移されたばかりのころはもとの場所<sup>ばしょ</sup>（現在の春日部中学校<sup>かすかべちゅうがくこう</sup>の校庭<sup>こうてい</sup>）に赤松<sup>あかまつ</sup>が生えていましたが、今ではもうあとかたもありません。

けれど、東武伊勢崎線<sup>とうぶいせきせん</sup>と春日部中学校<sup>かすかべちゅうがくこう</sup>のあいだにある三囲神社<sup>みめぐりじんじや</sup>は、今も静かに春日部の歴史<sup>れきし</sup>を見まもっているのです。



## (6) 在<sup>あり</sup>原<sup>わらの</sup>業<sup>なり</sup>平<sup>ひら</sup>の旅<sup>たび</sup>

むかし、京<sup>きょう</sup>のみやこに在<sup>あり</sup>原<sup>わらの</sup>業<sup>なり</sup>平<sup>ひら</sup>という貴族<sup>きぞく</sup>がいました。

この時代、みやこでは藤原氏<sup>ふじわらし</sup>という貴族<sup>きぞく</sup>が力<sup>ちから</sup>をもっていて、藤原の一族<sup>いっぞく</sup>ではない業平<sup>なりひら</sup>には、なかなか仕事<sup>しごと</sup>がまわってきません。

「ああ、このみやこに自分の居場所<sup>いばしよ</sup>はないのかなあ」

そう思った業平<sup>なりひら</sup>は、ふとあるかんがえを思いつきました。

「そうだ！ 東<sup>あづま</sup>のほうへ旅<sup>たび</sup>をして、自分にぴったりの場所<sup>ばしょ</sup>をみつけよう！」

そこで、業平<sup>なりひら</sup>は仲<sup>ななか</sup>のいい友だち<sup>ともだち</sup>といっしょに旅<sup>たび</sup>にでることにしました。

さて、旅<sup>たび</sup>にでた業平<sup>なりひら</sup>たちは、道<sup>みち</sup>に迷<sup>まよ</sup>いながらも東<sup>あづま</sup>へ東<sup>あづま</sup>へとすすみます。

「あれ？ ここはいったいどこだろう？」

気がつけば今<sup>いま</sup>の愛知<sup>あいち</sup>県<sup>けん</sup>あたり、八橋<sup>やっはし</sup>という場所<sup>ばしょ</sup>です。

「おや、川<sup>がわ</sup>がクモ<sup>くも</sup>の足<sup>あし</sup>みたい<sup>ごと</sup>にたくさんわかれて<sup>わかれて</sup>いるぞ？」

「ほんとうだ！ ひとつひとつに橋<sup>はし</sup>がかかっている！」

ひとつ、ふたつ、みーっつ……

かぞえてみると橋<sup>はし</sup>は八<sup>やっ</sup>つあります。

「なるほど、だから八橋<sup>やっはし</sup>というんだ！」

感心<sup>かんしん</sup>した業平<sup>なりひら</sup>たちは、その川<sup>がわ</sup>のほとり<sup>ほとり</sup>で休<sup>やす</sup>むことにしました。

「お、きれいな花<sup>はな</sup>がさいているぞ？」

「ああ、それはかきつばた<sup>かきつばた</sup>というんだ。せ  
っかくだから、かきつばた<sup>かきつばた</sup>の5<sup>ご</sup>文字<sup>もじ</sup>を句<sup>く</sup>  
うえ<sup>うた</sup>において歌<sup>うた</sup>をよもうよ」



そこで、業平<sup>なりひら</sup>がかんがえた歌<sup>うた</sup>は、

から衣<sup>ころも</sup> きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞ思<sup>おも</sup>ふ  
(着<sup>き</sup>なれた唐<sup>から</sup>の衣<sup>ころも</sup>のように、添<sup>そ</sup>いなれた妻<sup>つま</sup>を都<sup>みやこ</sup>に残<sup>のこ</sup>して来たのでこの遠<sup>と</sup>い旅<sup>おと</sup>が悲<sup>かな</sup>しく思<sup>おも</sup>われることだ)

という、奥<sup>おく</sup>さんをなつかしむ歌<sup>うた</sup>でした。

あまりにかなしい歌<sup>うた</sup>だったので、いっしょにいた友だち<sup>ともだち</sup>はなみだをこぼすほどでした。

さらにすすんで、業平<sup>なりひら</sup>たちは今<sup>いま</sup>の静岡<sup>しずおか</sup>県<sup>けん</sup>のあたり<sup>あたり</sup>にまでやって来<sup>き</sup>ました。

「なんだか道<sup>みち</sup>がほそくなってきたよ」

「ツタやモミジがしげってうすぐらいよ」

気味悪<sup>きみわる</sup>がりながらすすんでいくと、前<sup>まへ</sup>から男<sup>おとこ</sup>がやって来<sup>き</sup>ました。

かっこうからすると、旅をしながら修行をしているお坊さんのようです。  
「やあ、おひさしぶりですね。こんな道でどうされたのですか？」  
そうきかれて顔を見れば、業平の知っている人です。  
ちょうどいい機会なので、みやこに残った友だちに手紙を届けてもらうことにしました。

やがて、さびしい道をぬけると目の前に山があらわれました。  
「うわあ、なんて大きな山なんだろう！」  
「あれは富士山っていう山さ」  
富士山を見れば、冬でもないのに雪が降り積もっています。  
「なんだか信じられないなあ」  
富士山はみやこにある比叡という山を20ばかり重ねた高さで、形は塩を積みあげたようです。  
「まったく、富士山っていうのは季節をわきまえない山だなあ」  
業平たちは感心してしまいました。

つぎに、業平たちはいまの埼玉県のあたりにやってきました。  
「ほんとうにずいぶん遠くまで来てしまったものだなあ」  
悲しい気もちになって川を見ていると、  
「おーい、舟にのるなら早くしろ！ 日がしずんでしまうぞ！」  
と渡し守が声をかけてくれました。

業平たちは舟に乗ります。  
日ぐれどきの川風はつめたく、ひどくもの悲しい感じでした。ふと川面を見ると、くちばしと足の赤い鳥が、魚をとりながらむれていました。  
「渡し守さん、あれはいったいなんという鳥だい？」  
業平がきくと、  
「あれはみやこ鳥っていうのさ」  
と渡し守はおしえてくれました。

「みやこ鳥だなんて、京のみやこを思いださせる名まえだなあ」  
それを思うと急にみやこにおいてきた奥さんのことが気になって、業平たちは舟の上で泣いてしまいました。



このおはなしにでてくる川は、今、春日部市をながれる古隅田川だともいわれています。そして、浜川戸の八幡神社には、業平にかんする石碑も残っています。



## (7) 梅若丸の伝説

むかしむかし、今から1000年も前のことです。

京のみやこに吉田少将惟房と花御前という人が住んでいました。ふたりはなに不自由なくくらしていましたが、さんねんなことに子どもがいませんでした。

そこでふたりが神様に願をかけたところ、ある晩花御前は口の中に梅の花が入るゆめを見ました。そして、かわいい赤ちゃんが生まれたので、ふたりはとてもよろこんで、その男の子を梅若丸と名づけました。

ところが、梅若丸が4才のとき、お父さんの惟房が病気で亡くなってしまいました。

お母さんの花御前はとても悲しみ、「しっかりと勉強してお父さまのようになりっぱなかなになるように」と7才になった梅若丸をお寺に入れました。

ところが、このようすをものかげからこっそり見ている男がいました。

それは、信夫の藤太という悪人でした。信夫の藤太は、子どもをだましてゆかいし、どこか遠いところへ売りはらってしまいう人買いでした。梅若丸がかわいらしいのに目をつけ、なんとかだましてつれて行けないものかとかんがえました。



そこで、藤太は梅若丸に、お母さんが病気だからむかえに来たとうそをつき、まんまとお寺から連れだしてしまいました。

藤太は梅若丸を連れてどんどん東にあるいていきます。

つかれはてた梅若丸は病気になり、今の春日部、古隅田川のあたりまでくると一歩も歩けなくなってしまいました。おこった藤太は梅若丸を川につき落とし、どこかに逃げ去ってしまいました。

梅若丸は川の流に流されてしまいましたが、お母さんからもらったお守りのひもがヤナギの枝にひっかかり、どうにか岸にはいあがることができました。

そして、ちょうどおりかかった親切な村の人にたすけられたのです。

けれども、梅若丸の病気は少しもよくなりません。村人たちが看病しましたが、悪くなるいっぽうです。

そして、あるとき梅若丸は、

「もしも、お母さんがぼくのことをさがしにきたら、川原のつゆのようにはかなく死んでしまったとつたえておくれ、隅田川のみやこ鳥よ」という歌を残して息をひきとってしまいました。

さて、梅若丸がゆうかいされたと知った花御前は、梅若丸をさがしに今の春日部のあたりにまでやって来ました。

すると、村の人たちがさくらの木をうえた塚の前で、念仏をとえています。ふしぎに思ってきたら、1年前に人買いにだまされてすてられた、梅若丸という男の子の墓だということです。

悲しみにしずんだ花御前は、一心に念仏をとえました。すると、さくらの木の下に梅若丸があらわれたのです。

なつかしさのあまり花御前がだこうとしても、梅若丸は、まぼろしのようにさわることもできません。

そして、夜明けがくると梅若丸はいつのまにか消えてしまいました。

かわいそうに思った村人たちは、花御前のために梅若丸の塚のそばに小さな小屋をたててあげました。

花御前は尼となり、毎日のように念仏をあげていましたが、ある日、池に梅若丸のまぼろしがうつっているのを見て無我夢中でとびこんでしまいました。

その池は今はもう残っていません。

ただ、春日部の新方袋にある満蔵寺というお寺には、今も梅若丸の塚が残り、この悲しいお話をつたえています。



## (8) やったり踊りのはじまり

むかしむかしのお話です。

武里の大畑と備後のあいだには、作物の実らないあれはてた大地が広がっていました。この土地をもつと、イネが実らないのに代官様によけいに年貢をとられたり、仕事を命じられたりしてしまいます。だから、大畑と備後の人々は、おたがいに土地を押しつけあっていました。

けれども、なかなか決着はつきません。

「そうだ、すもうで決着をつけよう！」

困った村の人々は、村の力もちをそれぞれ選び、すもうで負けたほうがその土地をひきとるということに決めました。

「は一っけよい、のこったのこった！」

大畑のせんしゅも、備後のせんしゅもいっしょうけんめいがんばります。

「がんばれがんばれ！」

「まけるなまけるな！」

なかなかつかない勝負に、だれもが息をのんだとき――

「えいやっ！」

大畑の選手が備後の選手をなげとばしてしまいました。

「ヤッターナー、ヤッターナー！（やった、やったあ！）」

大畑の村人は大よろこびです。みんな、おどりあがってしまいました。

よろこんだ大畑の人々は、これを記念してお祭りをひらきます。毎年7月15日に近い土曜日、武里駅近くの大畑香取神社でおこなわれます。

「ヤッターナー、ヤッターナー」  
のかけ声とともにおどり、現在ではちびっ子も参加してそれはみごとなものです。

このやったりおどりは埼玉県の無形民俗文化財に指定され、春日部を代表するとても有名なおどりになりました。

